

## 教義論考 三部経の教説と親鸞聖人の三経観について述べよ

### 一、三部経の教説

#### 一-一、仏説無量寿経(大経)の教説

##### 一、構成

『大経』は、序文に出世本懐、正宗分に 弥陀成仏の因果、衆生往生の因果、 釈尊勸誡、流通分には弥勒付属が説かれている。

- ・ 弥陀成仏の因として、四十八願、就中、衆生浄土往生の正因三願が誓われている。
- ・ 下巻には、第十一願・第十七願・第十八願が成就したことを説いて衆生往生の因を的示し、「往観偈」の後に浄土往生の衆生の果徳が説かれる。
- ・ 流通分には、未来世に成仏して衆生を教化する弥勒菩薩に教えが委嘱される。聞名を得て乃至一念(行の一念)する旨が説かれる(Ref 註 P81)ことから、大経は一貫して聞名を重視していることが判る(Ref P41)。

##### 二、『大経』は、真実教である。

###### 一)宣言

- ・ 「教文類」の標拳には、「大無量寿経 真実の教、浄土真宗」とあり、冒頭に「それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり」と宣言される(Ref 全 P2、註P135)。

###### 二)根拠

- ・ 「教文類」に「五徳隋現」と「出世本懐」が示され、本願を経の宗致(要)とし名号を経の体(本質)とする經典である旨が明らかにされている(Ref 全 P3)通り、本願の名号聞信によって煩惱成就の衆生が残らず救われていくことが真実教の証である。
- ・ 親鸞聖人も「教文類」に、「この経の大意は、弥陀、誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで選んで功德の宝を施することを致す。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもってせんと欲すなり。」と示されている(Ref 全 P2-3)。ここに「真実之利」とは本願の名号によって得る利益を云う(Ref註 P135)。

##### 三、第十八願が真実願である。

- ・ 親鸞聖人は第十八願を真実五願開示することに依って第十八願の本質は「本願力廻向された名号を聞信せしめることによる摂取不捨の教え」にあることを明らかにされた。「聞名」は、第十七願・同成就文を根拠とし、「摂取不捨」は、如来会第十一願及び観經第九真身観に基づく。
- ・ この為、浄土真宗の教義は「主願立法」で構成され、阿弥陀仏の本願海が縁起した法義である旨が示された。よって、真実五巻すべてに願文がまず標拳として示される。

##### 行巻標拳について(考察)

- ・ 因みに行巻の標拳は、第十八願の選択本願の行(乃至十念)が第十七願(諸仏称名の願)の上

に立脚していることが示される。

・斯かる論理が成立するのは、大行が衆生に回向された如来行であるからであり(Ref 全 P5)、第十七願成就文を介して聞名の論理を確実ならしめる為であるとお聞かせに与っている(Ref 1)、 )。

#### 四、聞名は、難信の法である

##### 四 一、難信の語義

・「難信」とは本願力廻向の法が仏道の一般的な道理に超え優れた法である旨を顕すと同時に、衆生が領受するには疑いが障害となるからこれを誡める趣旨である(Ref P71)。

##### 四 二、難信の理由(考察)

- ・ 他力の法を聞信するには、自身が救いの目当て(機)たる凡夫の自覚を前提とする。
- ・ 然るに、自惚れ強い人間が凡夫の自覚に至るは容易でなく法のお育てに待つよりない。
- ・ この為、親鸞聖人は、『観経』(第十九願)と『小経』(第二十願)を方便の教として取り込んで三願転入のプロセスを示し、教相判釈された(Ref 7)ものと窺われる。

### 一-二、観無量寿経(観経)の教説

親鸞聖人の観経観は、善導大師に基づく、『観経』は王舎城の悲劇を契機に説かれた。

#### 一、釈迦微笑の素懐

・韋提希の極楽に往生したいとの求めに応じて、浄土教を説く機縁が熟したとみて釈尊が微笑されたことを云う(Ref 全 P50)。韋提希のみならず後世の有識に極楽往生の道が開けたことを意味する。両処二会の経であることが是を物語る。

#### 二、序文

・三福を散善顕行縁とし、後続を定善示観縁として、定善十三観、散善三観の序に位置づけられる。

#### 三、正宗分「定善」

・善導大師は専ら浄土の観想を説く十三観だけを定善とされる。定善十三観が説かれる趣旨は、とても定善に耐ええない愚かで罪深い我が身の姿を知らしめる教育的方便である。第七、八、九観が重要である。

・第七華座観では、除苦惱法を解説しようと釈尊が説かれるのと呼応して弥陀三尊が住立空中される。隠彰の根拠の一つである。

・第八像観では、諸仏如来は法界身であって衆生の心相に入ることが示される。

・第九真身観では一々の光明の働きとして念佛衆生攝取不捨が説かれる(Ref 全 P57)。「攝取不捨」の御文は、『大経』第十八願の「若不生者」に当たる(Ref )。

#### 四、正宗分「散善」

・定善観法を修すること叶わぬ者が散乱粗動の心のままでできる行法として釈尊自らお説き下さった仏自開の法である。

・散善は、浄土往生の機類を九品に分けて示される。第十六観、就中、下々品では、仏を想念できない悪人に口称念佛が説かれる(転教口称)(Ref 全 P555)。是を「唯願無行」だとして別時異趣を主張した撰論家に対して善導大師は六字釈により「願行具足」を明かされた。『大経』第十八願が往生正覚一体の本願だからであり、よって「浄土」は因願酬報の報土であり阿弥陀仏の本願力により凡夫入報が可能となる旨を明かされた(Ref 212)。

#### 五、流通分「念佛の付属」

・「持是語」以下は「弥陀の名号付属」と示して、『観経』に託された仏の真意は、衆生の専称弥陀仏名にあることを明らかにされた(Ref 全 P558)。

#### 六、『大経』真実教の「教相判釈体系」

・親鸞聖人は、『観経』の定善は、釈迦一代の聖道門の教えが包括されると示された。『大経』を真実教としたとき、『観経』は三願転入の教育的方便の第一段階を構成する。

### 一-三. 阿弥陀経の教説

一、発起序がなく釈尊の無問自説教である。

二、諸仏如来の名号讃嘆(大経第十七願)の經典であり、親鸞聖人はこれを尊重された(Ref )。諸仏の証誠は、諸仏咨嗟の御誓いを顕されたものだからである(Ref『一多証文』、注 P687)。

#### 三、第二十願と第十八願との対比(考察)

・第十七願では今生では釈尊が『大経』で縷々名号の謂れを説かれる(名号讃嘆)。

・第二十願は、その名号の謂れを聞いて尚、功德積累の自力念佛に流れる者を救い取らんとする果遂の誓いであると窺われる。

・これに対して、第十八願は、仰せのままに(疑蓋無雑)口称念佛(口業讃嘆)する者を攝取不捨なさるご本願だと窺われる。

### 二. 親鸞聖人の三経観

#### 一、真実願と方便願

・親鸞聖人は、生因三願の内、第十八願を真実の願とし、第十九願、第二十願を方便の願と御覧遊ばし、本願を疑惑すれば、方便浄土の往生となる旨を明かされた。

・胎化段と願文を対照すれば『大経』自身が第十九願、第二十願を胎生としているからである。『観経』『小経』が顕彰隠密の経と云われるのに対し、『大経』が顕露彰灼の経と云われる所以である(Ref『大経』「釈迦指勸分」「胎化段」 P79,81)。

## 二、真実経と方便経

・親鸞聖人の三経観の特色は、『大経』を真実教とし、浄土三部経を、一致門と差別門から御覧遊ばす。『観経』『小経』には、顕説と隠彰の両義があるからである。

## 三、顕説(三経差別門)

・『観経』は顕説では定散二善の法を説き、第十九願諸行往生の法を開説したものであり、『小経』も顕説では多善根多福德の自力念佛の法を説き、第二十願の法を開説したものである。但し、小経隠顕は、飽くまで観経準知であり、第二十願を標挙に挙げて示されたものである(Ref )。

## 四、隠彰(三経一致門)

・三経共に『大経』の本願の法を説く。

一)『観経』もその本意は定散二善を廃して他力念仏を説く。善導大師は、付属の文により念観廃立(定善観法を廃して称名念仏を立てる意)の積を立てられた。親鸞聖人は、その積意を受けて顕彰隠密(表面に説かれる顕説と裏面に隠微に説かれた隠彰、密は釈尊の密意を指す)の積を施されたという見解がある(Ref )。

### 『観経』下々品の口称念仏の意義(考察)

・『観経』下々品の機に勧められた念仏は、「汝若不能念者、応称無量寿佛」(Ref 全 P65)であるから、名号の謂れを聞信する暇のない口称念仏である。これは、「乃至十念」の主体が凡夫であることの証左である(Ref )と同時に、「疑蓋無雜」のままに称えられた十念であるから第十八願に誓われた他力の念佛そのものであることに疑いの余地はない。大経流通分に一経の肝要として阿難に付属された念佛も全くそれに他ならない。口称念仏は、五念門が一点に集約された讃嘆門である(Ref 1))からである。

### 小経の執持名号について

・『小経』の執持名号は、経の当面では自力の念佛なるも、経の末尾の「一切世間の為にこの難信の法を説く」とあるについて、『大経』末尾の「難中之難無過此難」が他力念佛を指すのと同じとしてその本意は他力念佛の法を説くと見られた。(Ref P68)。

## 三、世俗化の時代に即応する教学確立の可能性

・新宗教、新々宗教の現れに見る如く、現代は、自らの体験的アプローチを求める世俗化の時代である。伝統的な教学理解の押しつけでは現代人の耳に入らない。

・さすれば、自力を恐れる余り、大行を法体名号に押し込めて徒に衆生の実践態様を隠したり、ものがらの定義(出体積)のない信心を行と切り離して先に獲得せよというのはいかにも無理がある。

・斯かる時代にあっては、大行の実践的意義を明確に打ち出す教学の確立こそ喫緊の課題では

ないかと窺う(Ref )。

・蓋し、聞名の聞自体は、行の果又は相に当たると見られるので教行証の三法題として明かすには、大行が衆生の上において行ぜられる実践態様を明示しなくてはならない。

親鸞聖人は、行巻の標拳を諸仏称名の願と示して、第十七願の諸仏如来の口業讃嘆が実は第十八願の乃至十念の根拠となるとお示し下さった。その意義は、『大経』の明かす如来の本願海の教えの促すところにより、仰せの儘に讃嘆行たる乃至十念を行ぜしめられ、聞こえて下さるお名号が弥陀の本願招喚の勅命(直説)であると示すことにあると窺われる。

それを支えるお聴聞のコミュニティの復活を重点課題として実践的に取組むことは我々に課せられた喫緊の課題ではないかと窺うものである。

#### 四. 参考文献(reference:略称 Ref)

(凡例)全 全書、註 註釈版、七註 七祖註釈版

- ・ 勸学寮編『浄土三部経と七祖の教え』
- ・ 『教行信証』の研究 第二巻 大田利生和上「教文類」と『無量寿経』(至心信楽の対象が名号であることの出拠)。
- ・ 梯 実圓和上行信教校ご本典購読御講義  
ア)教相判釈(2012/10/15)、  
イ)行巻標拳(2012/11/19)
- ・ 大田 利生和上三経七祖教義別科御講義
- ・ 殿内 恒 和上本典概説別科御講義
- ・ 筆者ウェブサイト <http://syohgakuji.web.fc2.com/24112li.pdf>
- ・ 筆者 龍谷教学第四十七号 P29 ~ 「乃至十念の仏意を窺う」

以上  
合掌

正覚寺仏壮総会 平成 25 年 1 月中旬(日程追って決定)、午後八時より

正覚寺仏婦例会 毎月十六日午後七時より

著作編集兼発行元 (本願寺派 正覚寺内)

〒520-0501 大津市北小松四五二番地 077-596-0166, FAX077-596-0196 住職 堅田玄宿